

第24期日本学術会議 第4回環境学委員会
議事録

日 時：平成31年4月26日(金) 13:00～15:00

場 所：日本学術会議 6階 6-A(1)会議室

出席者：石川義孝、西條辰義、高村ゆかり、武内和彦、丹下健、古谷研、浅見真理、阿
尻雅文、高橋桂子、中村尚、春山成子、石川幹子、大政謙次、花木啓祐、福士
謙介、横張真、渡辺知保（スカイプ参加）（名簿順）

欠席者：岡田真美子、秋葉澄伯、石塚真由美、南條正巳、磯部雅彦、田辺新一、蟹江憲
史、鷺谷いづみ（名簿順）

事務局：高橋 和也、横田 真理江

議 事

1. 環境学に関する国際関係の動向

武内委員から、環境学関連の国際活動として、サイエンス 20Japan、アジア学術会議、
フューチャーアースについて報告され、以下を中心に説明があった。

- ・サイエンス 20 Japan では気候変動と海洋プラスチックごみを中心に海洋環境と生態
系の保全が議論され、海洋が陸域の影響を強く受けることから陸海を一体化した視点
の重要性が確認された。この点を含む6提言から成る共同声明が採択された。
- ・アジア学術会議では「社会のための科学：アジアにおける SDGs の達成に向けた戦略」
をテーマのもとで共同宣言がとりまとめられた。
- ・ICSU などの複数の学術コミュニティを束ねた組織されたフューチャーアースでは、
各コミュニティのフューチャーアースへの関心が薄れて来ている。分野連携を図るた
めの仕組みが検討されている。

2. 各分科会からの活動状況ご報告

環境科学分科会、環境リスク分科会、環境政策・環境計画分科会（横張）、都市と自
然と環境分科会、FE・WCRP 合同分科会、フューチャー・デザイン分科会から、活動状
況の報告があった。

3. 今後の活動方針等

予算の制約がある中で、今期の環境学委員会の活動成果をどのようにとりまとめるか
について以下の意見交換が行われ、それを踏まえて役員が原案を作成することとなった。

- ・「日本の展望 2020」を環境学の観点から補強するような方向性はどうか。
- ・2010 年に表出した報告「環境学分野の展望—持続可能な社会に向けた国土・地球環
境形成に対する環境学からの提案—」が紹介され、その後発生した、東日本大震災に
よって状況は大きく変わったものの、表出時点における環境学の課題を取りまとめた
ものとして有用であることが確認された。
- ・同様に、環境学委員会では、22 期に報告「環境学の俯瞰」、23 期に報告「持続可能な
開発目標(SDGs)の達成に向けて日本の学術界が果たすべき役割」、報告「理学・工学
分野全体のロードマップ」の分野別ロードマップを表出しており、これらの成果を踏
まえた検討はどうか。
- ・環境学と防災減災のつながりが出てきている。IPCC、SDGs 等との関連で環境学の新
たな役割が出てきた。グリーンインフラといった環境と社会を統合して検討すべき概
念が出てきている。過去を振り返り、未来をどうすべきか。
- ・各分科会でこれまでの 10 年を振り返り、次世代へのメッセージを出すのはどうか。
- ・「日本の展望 2020」ではビジョンを立ててバックキャストにより課題を抽出するとし

ているが、ビジョンをきちんとした議論で作ることが大事なので、ビジョン作成に光を当てるのはどうか。

- ・国土の利用について農学分野でまとめるにあたって議論のベースになる情報をどのように出していくかが課題となる。海ではどうか。
- ・海洋は陸域の人間活動の影響を強く受けることから、その影響評価が鍵となる。水産資源の確保と生態系の保全との関係も必要である。
- ・現在の都市政策のキーワードは縮小である。都市計画ではコンパクトしてティー化が鍵となっており、その守備範囲は狭まっている。成長時代に有効だった取り組みは縮小時代には適用できず、その点が課題である。森林と農村の問題は残されており、高齢化、野生生物の問題と相まって一層の困難に直面している。
- ・土木・建築系7学協会の会員減少、高齢化傾向も課題である。
- ・環境の課題は、社会と経済の課題と更に密接に関係しており、「第五次環境基本計画」（平成30年4月閣議決定）で示された地域の活力を最大限に発揮する「地域循環共生圏」に関する取り組みが、科学の面でも求められている。
- ・予算の制約があるが、これらを踏まえて役員が原案を作成することとなった。

4. 研究評価アンケートについて

環境学を構成する多岐に亘る分野を委員会としてまとめることが難しいことから各分科会に対応頂きそれらをまとめたものを環境学委員会として回答することとした。

5. その他

旅費、手当の制約上次回の会議が開催できるとしても10月の総会の間になる可能性がある。それまでに方向性を検討したい。国立環境研究所の外部公開シンポジウムは動画配信で3万5千人に視聴されるなど環境分野の関心の高さを再認識した。（環境学の今後の展開についてインターネットでの開催も含め）公開シンポなども検討することも十分あるのではないか。